
けいおん 男子部員が入ったら

クラウド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん 男子部員が入つたら

【NNコード】

N8697M

【作者名】

クラウド

【あらすじ】

友達もいない、いじめられ続けた少年が
桜が丘高校に編入し主人公達と部活動を始める。

初登校ー（前書き）

これはファンファイクションです。
実際のけいおんとは違いますので、ご了承ください。

初登校！

夏が終わり、二学期が始まったころ

今日から共学になった

私立桜が丘高校に編入する事になった僕は
たんたんと、通学路を歩いていく。

僕の名前は、桜咲 稜 さくらぎさき りょう

朝早く家をでてしまったせいか
道に人がいない。

「つまくやつていけるかなあ。」

などと言つてる間に桜が丘高校に着いてしまった。

そして、時が過ぎて・・・・・

先生につられ、一年一組の教室に来た。

自己紹介を済まし、指定された席に着いた。

休み時間に入り、机の整理をしていると

「桜咲君」

隣から声をかけられた。

ふと隣を見ると、

黒髪のツインテイルの女の子がいた

僕 「なに？」

梓 「私、中野梓っていうんだ。ようしぐね

僕 「あ、うん。よろしくね」

そんなこんなで

これから新しい高校生活が始まるのだった。

初登校ー（後書き）

すこしく終わり方が中途半端でいいません。
これぐらいに切つておかないと
長くなりすぎるるので
切りました。

本当に中途半端でいいません。

入部！

桜が丘高校に登校し始めて

もう一週間が過ぎていた。

一週間で友達が何人かできた。

友達が今までいなかつた僕には、奇跡みたいな事だ。

今までいじめられた僕は

学校はすくべつまらない所だと思つていたが

桜が丘に来てからは、まるで違つ。

学校のイメージが180度変わった。

そこで今、部活に入ろうとしている。

その部活の名は・・・軽音部。

僕が軽音部に入ろうと思った理由は、ベースとギターができるし、音楽が好きだからだ。

だから今、入部届けを出し終え、

部屋の前に立っている。

ドアノブに手を掛け、

ドアを開けた・・・・・

僕 「こんにちは

机に座つた5人が、
一斉に振り向く。

梓 「稜くん！」

律 「何？梓の知り合いか？」

梓が駆け寄ってきた。

梓 「なんでここに？」

僕 「えと、軽音部に今日入部したんだ

5人 「ええ、うそおおお！？」

すく驚いてる様子だ。

僕 「なにもそんなに驚かなくても・・・

梓 「いや、驚くよお、だつて男子部員なんて初めてだもん

律 「じゃあ、今年一人目だな！」

紬 「とつあえず、お茶でもいがが？」

澪 「そうだな、ひとまず落ち着け」

唯 「おいで、おいで～」

なんか手招きしてる・・・・
行つたほうがいいのかな？

とりあえず、僕は用意してもらつた椅子に座つた。

律 「じゃ、まず自己紹介だな。私は部長の田井中律。ドリームやつ
てまーす」

なんか元気な人だな。

澪 「私は、秋山澪。ベースやつてるよ

大人っぽいなあ。

紬 「私は夢吹紬。キーボードやつてます」
ぼわぼわだあ。

唯 「私は平沢唯。ギターだよあ

おお、天然っぽい。

梓 「私はもう知ってるよな。ギター弾いてるよ

僕 「僕は桜咲稜です。一応、ベースとギターでできます」

梓 「へえ、ベースとギターできたんだあ」

唯 「なにか弾いてみて」

つとギターを渡してきた。

唯 「ああ、ギー太が浮気を・・・」

律 「お前が渡したんだろ」

僕 「じゃあ、弾いてみます」

僕はお気に入りの曲を弾いた。

パチパチパチっと、拍手された。

実はこれが初めて人に見せる演奏だった。

梓 「稜くん、うまい！」

紬 「稜くん上手」

澪 「稜、うまいじゃないか」

唯 「おおおおお」

律 「うまいじやん」

僕 「そ、 そうですか？」

5人「うん」

僕 「よかつたあ、 下手つとか言われたりどうつかと思いまして」

梓 「自信持つていいよ、 上手だつたよ」

律 「ギター3決定だな」

僕 「はい！」

そして、 時が流れ・・・

澪 「じゃ、 また明日」

律 「そんじやな」

紬 「また明日」

唯 「ばいばい」

僕は先輩達と別れて、 梓と帰っていた。
梓とは家が近く、 帰る道も同じだ。

梓 「稜くんのギター、 上手だつたよね

僕 「ありがとう。 人前で弾いたの初めてだつたよ」

梓 「 そうなの？私てつくり友達の前とかでいつも弾いてるのかな
つて思つてた 」

僕 「 そう 」

ちよつぴり僕は切なくなつた。

一人でしゃべりながら歩いていると、

梓の家が見えてきた。

梓 「 じゃあ、また明日ね 」

僕 「 うん。じゃあね 」

梓 「 あ、稜くん！ 」

僕 「 なに？ 」

梓 「 明日いつしょに行かない？ 」

僕 「 うん。いいよ 」

梓 「 じゃあ、ばいばい 」

僕 「 ばいばい 」

明日かあ。

楽しみだな。

僕は、明日が待ち遠しくなった。

入部！（後書き）

さて、軽音部に入部した稜は
これからどんな生活をおくるのでじょうつか。
楽しみです。

お泊りー（宿泊モード）

すこません。

書いて直しての繰り返しで遅くなりました。
ホントにお待たせいたしました。
お楽しみください。

お泊り！

チリリリリイイイイイ

いつもより早く起きた。

今田は楽しみにしていた梓と登校する日だ。

リビングに向かい、朝食を作る。

もつ向年もこいつてきた。

朝食を済まし、準備をして外に出た。

歩いて梓の家に向かい、インターホンを押した。

「あ」ベドキドキしている。

誰かと一緒に登校するのは、今日が初めてだった。

梓 「おはよう」

僕 「おはよう」

梓 「あ、それが稜くんのギターかあ」

僕は今日、ギターを持ってきていた。

僕 「うん。ずっと持つてるとおもいなあ、ギターって

梓 「すぐ慣れるよ。でも肩痛くなるんだよね」

僕 「明日、肩こりてそうだなあ」

梓 「ふふ」

僕 「そういうえば、梓つていつからギターやってるの?」

梓 「四年生からだよ。稜くんは?」

僕 「僕は五年生から」

梓 「だから稜くん上手なんだあ」

僕 「梓も上手だったよ。完璧だつたじやないか」

梓 「そりかな・・・ありがと」

僕 「梓もありがとね」

梓 「うん」

色々と話していると、学校に着いた。

そして教室に着いた。

憂 「梓ちゃん、稜くんおはよう

二人 「おはよう

憂 「稜くん軽音部入ったんでしょーお姉ちゃんから聞いたよ」

僕 「うん

梓 「稜くんギター上手なんだよ」

憂 「へえ～聞いてみたいなあ」

僕 「唯先輩と梓にはかなわないよ」

梓 「そんな事無いよ」

そんな会話をしていると・・・

純 「おはよー

憂 「純ちゃんおはよー

梓 「おはよー純

僕 「おはよー

純 「昨日、軽音部の人達といたけど、どうかしたの？稜

僕 「昨日、軽音部に入ったんだ

純 「ええ、うそおおおおー！？」

僕 「なんかそれ一回目・・・

梓 「軽音部のどもと回じ・・・」

純 「なんの楽器やるの?」

僕 「ギターになつたよ」

純 「へえ、ギターできたんだ」

梓 「あ、それと、稜くんベースもできるんだよ

純 「ええ、うそおおおおー!?」

僕 「三回田ですか・・・」

純 「今度聞かせてよ」

憂 「私も聞きたい」

梓 「私もベース聞きたいなあ」

僕 「わかったよ。じゃあ今度ね

三人 「うん」

今日はいい日になりそうだ。

そして、時が過ぎ・・・放課後

澪 「あの〜曲打ち合わせとかしたいんだけど

律 「今日は時間がないなあ」

唯 「ホントだ。もうこんな時間

律 「しかも明日から一日間休みだしなあ

梓 「文化祭も近いですし、どうします?

僕 「あのー、曲の打ち合わせってそんなに急がなきゃダメなんですか?」

澪 「うん。文化祭でやる曲だけを練習するから

律 「今年は曲数多いもんなあ」

紬 「じゅあにんなのまじつ・お泊り会とか

ムギ先輩、うれしそうだな。

澪 「でも、どうお泊まるんだ?」
律 「あ、賛成。楽しいし、一気に決められるしな

唯 「それなら、家に泊めてよー誰もこないよー

律 「うんじゃ決まりだな。今日の夜、唯の家に集合な

澪 「でも憂ひやん大丈夫か?」

唯 「今メールしたら、おkだつて」

紬 「わくわく」

梓 「お泊りだなんて久しぶりだなあ」

お泊りつて・・・僕男だけど・・・いいのかな・・・

僕 「あの、その、えと、僕なんかが行つていいんですか?」

律 「何言つてんだよ。整音部だろ」

唯 「いいんだよ~おいでよ~」

澪 「いいに決まってるじゃないか」

紬 「楽しいわよ~」

梓 「稜くんも来ていいんだよ」

僕 「うん。行きます」

律 「んじゃ、これで一時解散な

そこでひとまず解散した。

梓と一緒に行くことになつた僕は家に戻り準備をしていた。

下着、ジャージ、筆箱、メモ帳、タオル、日記。

よし、完了。

あとは、お土産だな。途中で買つていこう。

家を出て、梓の家に向かつた。

インター ホンを押す。

しばらくすると、梓が出てきた。

梓 「お待たせ~」

僕 「おお、私服初めて見た」

梓 「そりだつけ? ビリ~」

僕 「かわいいよ~」

梓 「・・・ありがと」

僕 「えと、お土産買つて行つてもいい?」

梓 「いいよ~」

僕らは店に寄り、唯先輩の家に向かつた。

ピンポーン。

しばらくすると、憂が出てきた。

憂 「いらっしゃい。上がつて

僕 「はいこれお土産」

僕は、せんべいの箱を渡した。

憂 「ありがとうございます」

梓 「あ、憂、私もお土産」

憂 「梓ちゃんありがとうございます」

二人 「お邪魔します」

リビングに行くと、先輩達が居た。

律 「お、やつと来たか。」

澪 「じゃあ、打ち合わせ始めようか」

しばらくして。

律 「あ～終わつた～」

律先輩は背伸びした。

梓 「楽しみですね」

唯 「やつと・・終わつた～」

その後、みんなで夕食を済ませ。

一息ついたこと。

律 「いい事思いついた！」

唯 「何？」

何だろう。

紬 「わくわく

律 「王様ゲームやろうか？」

澪 「ええええ

唯&紬 「やりたい！」

梓 「どうかなあ

律 「稜はどうする？」

僕 「やってみたいのです

律 「憂ちゃんは？」

憂 「やりたいです

律 「じゃあ決まりだな

律先輩が、割り箸に色を塗つてる。

あれを引けば王様らしい。

律先輩がすべて混せて、みんなの前に置いた。

みんなは引いた。王様は憂になつた。

憂 「じゃあ、2番が4番の肩を揉む」

唯 「あ、私が2番だ」

澪 「私は、4番」

唯先輩が、澪先輩の肩を揉みに行つた。

澪 「唯、うまい・・・んう・・・そこお

律 「・・・・H口い・・・

紬 「・・・はあ・・・

紬先輩が、なんか、すくべうつとつしてゐる。

梓 「声が・・・H口い・・・

なんか・・ほんとにH口い。

律 「まあ・・次いH

みんなでくじを引いた。

「よっしゃー、私が王様だあー」

「なにかな？」

「わくわく」

梓 一 なんだろ？

ホントなんだろ？

・ 5番と1番がギス！」

木
一
て
種
く
人
一
三
二
力
一
一
一

卷之三

行 事 記

卷之六

僕が1番で、梓が5番だった。

澤一 律しきりなんても……」

「うわあ・・・ああ・・・ああ・・・」

梓の顔が赤い、たぶん僕も赤くなっているだろう。

律 「でも、王様ゲームだからしかたないぞ」「

紬 「梓ちゃん……がんばって……」

憂 「……どきどきしてきた……」

梓 「私なんかで……稜くんは……いいの?」

僕 「全然……大丈夫……けど、梓も僕なんかでいいのか?」

梓 「……うん……」

僕 「じゃあ……するよ……」

梓 「……うん……」

梓が目をつむり待っている。

僕は唇を近づけた。

やわらかい感触とともに、甘い味がした。

キスが終わった後、まともに、目が合った。

まだ、心臓が激しく動いている。

つて何さらつと大仕事してんだー!?

律 「ふつふつふ、私に感謝するんだな・・・イテテテ」

律先輩のホッペをつかんだ。んな恥ずかしいことを口にだすなー！

そのあとも王様ゲームは続き、時刻は9時を回ったころ。

唯 「あ、もうこんな時間」

憂 「お風呂沸かしましたよー」

なんとタイミングがいいんだろう。さすが憂。

律 「じゃあ誰から入るんだ?」

唯 「じゃんけんで決めない?」

律 「そんじゃ、じゃんけんな」

そつこいつでジャンケンになった。

全員 「ジャンケンポン！」

結果は、

六番 五番 四番 三番 二番 一番
稜 澄 憂 紗 唯 梓

七番 律

になつた。

律 「よかつたな～稜～女子が入つた後で～・・・イタツ」

澪 「恥ずかしい事をい～うな！」

澪先輩の拳が飛んだ。同時に、自分もホッペをつねつた。

梓 「じゃあ入つてきますね」

みんなが風呂に入つてゐる間、ボーッとしていた。

さつきのキスのことだ。

まだあの感触を忘れられない。

なにより、梓の顔が頭から離れない。

これは・・・恋か？

そんなことを長々と考えていたら、順番が回ってきた。

澪 「あがつたぞ～」

僕 「じゃあ、入つてきます」

自分のカバンを持って風呂場に向かつた。

そして時が過ぎて・・・・・・・・

夜になつた。

僕の寝る場所は一階のリビング。

先輩達は唯先輩の部屋、梓は憂の部屋で寝るがつだ。

今日は、寝ようとしても寝付けない。

頭の中が梓の事でいっぱいだからだ。

ボーッとしていると・・・・

ガチャツ

ドアの扉を開くとそこには梓がいた。

梓 「稜くん、起きてる?」

僕 「起きてるよ

梓 「稜くん・・・あの・・・その・・・一緒に寝てもいいかな・・・

「

僕 「・・・いいよ・・・」

梓が布団に入つてくる。

心臓が、さつきよつ激しく動いている。

梓 「今日ね・・・・・眠れないんだ・・・・・」

僕 「僕も・・・・・眠れないよ・・・・・」

布団の中で向かい合つた。

梓 「キスしたときから・・・・・なんか・・・・・どうきどうして・・・・・

僕 「僕なんかで・・・・・よかつたの・・?・・キス・・・・・」

自分で言つて恥ずかしい。

梓 「・・・・・うん・・・

僕 「そうか・・・・・よかつた・・・」

梓 「なんで・・・・・そんな事聞いたの?」

僕 「嫌じゃなかつたかなつて・・・思つてさ・・・」

梓 「嫌だなんて・・・そんな・・・そんな事無いよ・・・・・

「むしろ・・・・・嬉しかつたし・・・・・

僕 「え?・・・・・今・・・なんて・・?・・・」

最後の方は声が小さくて聞こえなかつた。

梓 「なんでもない・・・

「なんか……眠くなつてきちゃつた……」

僕 「じゃあ、寝ようか……」

梓 「うん」

梓が抱きついてきた。

僕 「え？ ……梓 ……？」

梓 「今日は……」ついで……寝たいから……嫌だった？」

むじり嬉しいくらいだよ……梓……。

僕 「嫌じゃないよ……」

梓 「よかったです……」

その後、僕は眠りに落ちた

不思議とそのときは、眠れた

ホッとしたからだろうか

そして……朝……

起きた時には遅かった……

律 「……これは……ラブラブですなあ～」

唯 「軽音部にカツップルができるやつたね」

僕 「…………んう…………あれ？…………先輩？？」

「つてー？…………」

田の前を見ると、梓が気持ちよさそうに寝息をたてている。

梓 「…………ふう…………ふう…………ふう…………」

さうこそ、僕の背中に手を回したままで、体が密着状態のまま離れな
い。

周りには、顔を赤くした澪先輩と、同じく顔を赤くした憂、
顔を輝かせている紺先輩と唯先輩、ニヤニヤした律先輩がいた。

律 「しつかりと『真撮らせてもらつたからな…………』

僕 「写真ー？それをどうするつもりですかー？」

梓を起こさないようにな小声で言つた。

ちよ・・それはまづい・・・・・律先輩なりぱり撒きかねない。

澪 「ごめん、稜・・・・止めれなかつた・・・

梓が起きたようだ。

梓 「…………んう…………稜くん…………おはよお…………」

「・・んう？先輩？・・・ああああーーー？」

梓もこの状況に気づいたようだ。

顔を真っ赤にしているか、かわいい。

体を離す。少しあひしげが

律
—
ふ
—
ふ
—
ふ
—
お
—
人さん

唯
一
これで
力ツブルだね！」

唯先輩余計なこと言うなー！！

様子は、このままでは、いつかは、必ず、

律
一様にガツシリ抱きついてたな」

梓
—
そそそ
それは
・
「

遷 一 律 困 て る た る

遷先輩 あじかたし !!

あれ？ たしか澪もじっと見ていたような気がするな？

澪
一
み
見てない見てない！」

梓 「澪先輩まで！？」

梓 「恥ずかしい・・・・・」

この後、みんなから質問攻めにされた。

はあ・・・どうなることやら・・・・・。

今田は梓へと手をひくへなれたのでした。

お泊りー（後書き）

なんか中途半端になってしまったような・・・・

それはさておき、次話では

意外な展開に、なると思います。

ああ・・・・遅くなりそうだなあ・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8697m/>

けいおん 男子部員が入ったら

2011年3月6日11時01分発行